



ライフワークとしての鉄道写真



京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

溝上慎一 (みぞかみ しんいち)

1996年、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。教育学博士(京都大学)。専門は自己形成論、青年期論、大学生の学びと成長論。鉄道写真はホームページ(<http://smizok.net>)でたくさん紹介しているので、是非一度訪れてみてください。

私は6歳から鉄ちゃんだ。全盛は国鉄からJRに代わる時期の私が高校生のときで、さよならと廃線(第三セクター化)が相次いだときだ。写真に収めないと人生終わってしまうかのような強迫観念に終始襲われ、全国を飛び回ったものだ。

しかし、大学生になって私は写真を単純に撮れなくなってしまった。ただ列車が好きで、撮りたいという思いで写真を撮っていただけだったのに、写真の撮り方にこだわりはじめてしまったのだ。こだわりの一つは、光の強さである。朝の光は力強く美しい! 雨でも曇りでも、日中の時間帯もおかまいなしに、ただ列車が来れば撮影していた私は、ある朝の時間帯だけに限定した写真を撮るようになる。いうまでもなく、列車のダイヤはさまざまだから、列車が朝に走っているとは限らない。撮影できる場所は限られるので、朝の時間帯にある撮影ポイントを通ずるとも限らない。しかも、晴れた日の太陽の力強さといっても、晴れないことのほうが多い。こうして撮影に(お金と時間をかけて)出かけても、列車を撮っても写真にならず、多くはボツになっていく。

もう一つのこだわりは、私はいったい何を撮っているのか、ということである。鉄ちゃんのセオリーのなかで、山海のなかを走る列車を撮るといふのがある。しかし、あるとき父親と写真家の個展に行った。富士山を対象としているその写真家が見せる富士山はすごか

った。四季折々の異なる富士山の顔がそこにはあった。富士山がバックにあって、列車が片隅にちょこっと走っている……そんな鉄道雑誌でよく見かける写真はかすみたいなものだと感じた。富士山を撮りたいなら富士山、列車を撮りたいなら列車、はっきりしろ! そう自問するようになった。

私は考えすぎて写真が撮れなくなってしまった。しかも、苦勞して写真を撮っていったい何があるんだろう、とまで考えはじめた。大学生になって37歳になるまで撮影をやめては再開し、やめては再開しを繰り返した。しかしようやく気づいた。そうだ、ただ列車が好きで、ただそれだけで写真を撮っていた私がかたしかに高校までにはいた。それだけでいいんじゃないか、と。私はまた撮影をはじめた。

私にとって鉄道写真は趣味ではない。ライフワークの一つだ。上述の撮影の観点には今でもこだわっている。しかし、それが先ではない。先にあるのは、私は列車の写真を撮るのが好きだったという単純な私の原風景だ。大学以降いろいろ趣味を探したが、どれも小さな楽しさ以上のものを見つかることはできなかった。そうして鉄道写真に戻った。しかし続けられなかった。しかし、鉄道写真は私を私へと繋ぐ

原風景だと見つけた以降は、黙々とこの活動を続けられている。楽しいからだという理由では説明した気にならない。私を私だと感じさせてくれる活動だからだとしかいえない。だから、撮影に行つて気晴らしになってその後仕事がかどる、などということはない。仕事が忙しく重圧も高まる中で、こんなことをしている場合ではないだろうと思うこともあるが、それは考えないことにした。鉄道写真は私にとってライフワークなのだから。

下の写真は、熱海近くの根府川橋梁で撮った寝台特急「サンライズ出雲」だ。セオリーでいけば、橋の外から海を入れて列車を写すのがポイントだ。私は、もうそんな写真に興味はない。あくまで列車を中心に、朝日を受けて橋梁を渡る写真を撮る。これが私のポイントだ。この有名な撮影地で、この構図で撮った写真を鉄道雑誌で見たことはない。単純な写真のように見えるが、私のなかでは最高の一枚だ。



サンライズ出雲